

【要旨】 タイ北部におけるバプテスト派宣 教の歴史的変遷と開発プロジェクト：ボ ーケーオ地区のカレンを事例として*

田 崎 郁 子

本稿では、タイ北部におけるバプテスト派キリスト教の中心地の1つであるボーケーオ地区¹を事例に、1930年代から2000年代までカレンを対象として行われてきた宣教活動の過程を示す。そして、当地では宣教活動と開発プロジェクトが車の両輪のように入れ子状になって進められてきたこと、それが現在イチゴをはじめとする換金作物栽培を大々的に導入しカレンらしからぬとされる忙しい生活を形成する母体となったと論じる。

カレンと呼ばれる人々は、主にタイとミャンマーに居住する。マイノリティの中でも比較的多くの人口を占め、植民地統治やその後の国民国家化の過程を通して、国家の中でのマイノリティの位置づけを考える際に重要な存在である。カレンの間では1828年ビルマで最初の受洗者が登場して以降、急速にキリスト教が布教し、タイとビルマを中心とする地域のバプテスト派の伝道や教会活動を牽引してきた。東南アジアにおけるバプテスト派宣教の最も成功した事例と言われ、他の民族への伝道を主に担ってきたのもカレンである。

*編集委員会注 本稿は要旨である。全文は大谷大学学術情報リポジトリ (<https://otani.repo.nii.ac.jp/>) の以下の URL に掲載。http://id.nii.ac.jp/1374/00008904/

1 現在タイ国カレン・バプテスト会議 (TKBC: Thailand Karen Baptist Convention) は、上から TKBC 本部→10の教区 (*Kr. k'wauz/ Th. phak*) →地区 (*Th. khet*) →教会タオブゴ (*Kr. taj of hpgof/ Th. khristcak*) と組織化されている。カレン語でタオブゴとは、中心となる教会に会員として所属する信徒を一定数以上もつ信徒の集合体のことである (建物としての教会はジョバーユワ: *Kr. jo ba ywa*=祈禱所と言われる)。本論文では教会と訳す。1つの教会タオブゴを形成する信徒の居住域は村落の境界とおおよそ一致するが、多少の重複がある。本文中に登場するM教会は1つのタオブゴとして独自の財政と委員会をもつ教会であり、ボーケーオ行政区内の9つのタオブゴとともにボーケーオ地区を形成する。ボーケーオ地区はチェンラーイ地区とともにチェンラーイ教区を形成する。

こういった事情を反映し、カレンのキリスト教受容に関してはこれまでも多くの研究がなされている。にも拘わらずそのほとんどは、カレンという民族のアイデンティティ形成あるいは保持や山地と低地との関係の中でキリスト教受容を論じてきた。同様に、東南アジアにおけるマイノリティのキリスト教や改宗に関する人類学的先行研究でも、そのほとんどが改宗と民族境界・エスニシティに着目し、キリスト教受容と信仰の変容を分析してきた。こういった研究はまずキリスト教を民族のナショナリズム形成の要因として捉えたために、その他の視点、例えばキリスト教を受容した人々が、実際にどのように生活を再編しながら暮らしているのか、という視点は抜け落ちていた。しかしアフリカやオセアニアなど他地域の研究では、キリスト教実践が生活スタイルや社会のあり方そのものをも再編してきたことが指摘されており、こういった視点抜きに、キリスト教がもたらしたものを論じることはできない。加えて近年、宗教と開発の接近に伴って、宗教組織や宗教的職能者が開発を担うなど開発研究の分野で「宗教への転回 (turn to religion)」が注目を浴びようになっている。また人類学では社会における宗教の役割や貢献に着目して宗教と世俗という二元論的な対立を取り払うような研究が行われている。

そこで本論でも上記の視点を援用し、宗教と開発との関係に着目する。そして、主に宣教側の文献資料から、地域における宣教活動と開発プロジェクトの展開を検討し、歴史的に辿ることで、カレンの人々のキリスト教受容がもたらした社会や生活の再編の一端を明らかにする。

調査地は、チェンマイ県サムーン郡ボーケーオ行政区に置かれたボーケーオ地区とその中心的教会であるM教会である。ボーケーオでは1930年代にバプテスト派による宣教活動が開始され、M教会が設立されると、地域の宣教拠点、開発拠点として発展し、北タイのバプテスト宣教の1つの中心地となっている。標高1000mの山中にありながら、宣教活動と行政・民間による種々の開発プロジェクト、鉱山採掘、換金作物としてのイチゴ栽培の浸透などの影響下で、町のように発展が行き届いた地域である。M教会のあるM集落あるいはボーケーオは、他のカレン地域と比較して、村人からも、村外のカレンからも、まるで経済合理性を具現化したかのように語られることが多い。例えば、「現金のことばかりしている」「現金がないと暮らせない」「しゃかりきに働く」「勤勉に働くことが常に監視されている」「カレンではなく北タイ人になり下がった」とい

う言い方がよくなされる。こういった語り口は、カトリック教会と信徒の設立したカレンの村で王室発信の「足を知る経済 (*Th. setthakit pho phiang*)」が流布し、自給自足的な生活が良しとされること、また北タイ農民連合 (Northern Farmers Network) などの NGO 活動に加わる村で、「森と共生する知恵を持ち自給的に暮らすカレン」というイメージが強調されることとは対照的である。これはまさに宣教活動と開発が一体となって地域を形成してきたからに他ならない。

そこで本論文第2節ではまず、タイにおけるバプテスト派の宣教活動の広がりの中に調査地ポーケーオ地区とM教会を位置づけた。

続く第3節では、ポーケーオの初期の宣教史をたどりながら、後にタイ北部の重要な宣教拠点の1つとなるM教会と信徒の集落が設立されるまでの過程を明らかにしている。ポーケーオでは、1930年代にチェンマイから派遣された宣教師やチェンラーイからの伝道師の影響のもとで、最初期の改宗者家族が確認されている。1940年代後半から50年代にかけて、米人宣教師らとチェンラーイ出身のカレン人伝道師ら、更にキリスト教に改宗したカレン人信徒の村人が中心になって、宣教拠点としてまずM教会が設立され、同時に教会の周りに信徒の居住場所としてM集落が形成され、続いて学校や診療所、外国人宣教団の居住する宣教ステーションが次々に建設されていった。ポーケーオは、北タイにおいては比較的早い時期から、教会 (*Kr. taj of hpgof*) が立ち上がり20世紀後半の一大宣教拠点となった地域でもある。このように形成されたM教会と信徒の集団が、バプテスト派の1つの中心地としてポーケーオ地区の他教会の形成にも貢献したことを示した。

第4節では、主に米人宣教師や TKBC によって書かれた報告書や論文、行政文書を元に、1950年代後半から90年代に至るまでポーケーオで行われてきた教会をはじめ行政や国際 NGO などそれぞれが主導した多様な開発プロジェクトの内容を明らかにした。そして、それぞれの機関による活動が積み重なって相乗効果を生み、換金作物を大々的に栽培する現在の生業の基盤を形作ってきたことを示した。具体的には、以下の5点に分けて言及している。

1) 1959年から72年にかけてポーケーオに居を構えた米人宣教師ディカーソン夫妻が行った教育・生活支援と女性労働へ着目した活動

2) 1965年から75年にかけての TKBC による山地での宣教活動 (1965-70年に

94 【要旨】 タイ北部におけるバプテスト派宣教の歴史の変遷と開発プロジェクト

は TKBC 本部から派遣された医師や農業技術者といった専門家である白人やカレン人指導者層を山村に送り込む Village Uplift というプロジェクトが、1971-75年にはローカルな教会の役割を重視しローカル・レベルでの指導者の育成と信徒の宗教理解の深化を図り、彼らが周辺村への布教を先導できるような形態へと変容させていった Fishing in Deep Waters というプロジェクトが、それぞれ展開された)

3) 1971年以降に国連主導で行われたプロジェクト HAMP (Thai/ United Nations Highland Agricultural Marketing and Production Project) とこの下にボーケーオに設立された農業技術センターの活動

4) 1986年から90年までの山地開発プロジェクト TN-HDP (Thai - Norwegian Church Aid Highland Development Project) による農業支援活動

5) 1994年にパーヤップ大学支援の下行われた貯蓄グループの設立とそれによる貯蓄概念の形成

以上より、ボーケーオでは1960年代頃からの宣教活動を中心として、女性労働を中心とした生活改善指導や労働生産性の向上、キリスト教徒としての概観を整えるための経済力向上が目指されてきたことが分かる。特に1960年代後半以降、ボーケーオは主に3つの農業関連開発プロジェクトの対象地域となり、バプテスト教会やタイ政府をはじめとする外部機関がこれを実施した。その結果、①女性労働の重視と、自給的な生活だけでなく換金作物栽培や織物などによる現金収入源を求める生活スタイルの形成、②外部への農業研修や他村視察などによる教育機会拡大と外部社会との連結・協同の可能性の開拓、③新しい技術や概念を受容し活用する素地の形成、④貯蓄グループの結成に伴う貯蓄概念の誕生、という多角的な影響が指摘できる。こういった影響は、後に村人がイチゴ栽培にとりかかることを容易にもし、拝金主義的で勤勉を強制されるかのような「カレンらしからぬ」と揶揄されることにもなる当地独特の労働スタイルや外部社会との関係性を身につけるためにも役立った、と結論付けた。